

# 東日本大震災 10 年と 地域学習支援実習映像制作クロニクル

法政大学キャリアデザイン学部教授 坂本 旬  
坂本ゼミ 井関愛美、鈴木真凜、中山賢吾、坂本萌々、  
ソウ・ギョウセン、高田結梨葉、福山瑠子

## はじめに

2021年は東日本大震災10周年である。大学によるボランティア規制が2011年4月に解除されてから筆者は同年7月以降ゼミ生とともに毎年宮城・福島を訪れてきた。2012年からは地域学習支援実習（コミュニティメディア班）として、ゼミ生以外の学生も参加することとなった。2020年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、9年間続いた被災地訪問は途絶えることとなったが、2年と3年のゼミ生は過去の映像作品を視聴し、9年の活動を迎えることにした。そして、2021年2月13日、武蔵大学で開催された白雉映像祭「学生・市民による映像を活用した地域の記録そしてコミュニティアーカイブ構築を考える」に参加し、発表を行った。そのテーマは「法政大坂本ゼミ：宮城・福島映像制作クロニクルとアーカイブの構想」であった。発表では、筆者による被災地取材実習の概要と年度ごとの活動内容の報告に続き、坂本ゼミ3年生による過去の映像作品の紹介と取材内容や方法の変化を報告した。本稿はこの発表をもとに、9年間の映像を整理し、坂本ゼミ・地域学習支援実習（コミュニティメディア班）の活動を振り返ることを目的とする。

## 1. 地域学習支援実習の概要

本実践の始まりは東日本大震災から3か月後から始まった坂本ゼミによるボランティア活動である。ゼミ生の一人である田邊美樹を中心にボランティアの計画が立てられ、宮城県亘理町中央児童センターで子どもを対象としたリトミックを行うことになった。2011年度は、7月2日を初回として、8月28日、12月2日、2012年1月26日の計4回現地に赴いて実施している。このボランティアは田邊の知人による「勝手に義援隊」と名付けられた活動に参加する形態で実施された。ボランティア活動としては、リトミック以外にさまざまな物資支援を行っている（田邊2021）。

映像撮影をするようになったきっかけは、保護者からの依頼であった。自宅が津波に流され、過去の写真もすべて失ったから思い出になる映像を撮ってほしいという。こうして撮影を始めたが、取材や作品を作ることを目的としていたわけではなかった。写真1（2011.7.2）はゼミ生にくっついて離れない子どもの様子である。津波の記憶がまだ生々しい時期の子どもたちにとって、身体を使って楽しむリトミックはまさに求められていた活動だったと言えるだろう。

一方、ゼミ活動としては、カンボジアでの映像

写真 1 (2011.7.2)



制作や都内小学校、法政第二中学校におけるビデオレター制作支援などを行っており、学生たちは映像制作のスキルを持っていた。田邊はリトミック活動の様子をまとめた「亙理町サンバな1日」を制作する。そして、福島に通って卒業制作としてドキュメンタリーに取り組むゼミ生も現れた。そしてできあがったのが「特別な夏～相双連合野球部の挑戦」である。

2012年度からキャリアデザイン学部で資格認定科目「地域学習支援」が設置される。筆者は秋期の実習の一部を「地域学習支援実習コミュニティメディア班」として担当することとなった。それまではボランティアとして被災地に通っていたが、授業としても学生とともに被災地に行くことになったのである。さらに、実習に向けて武蔵大学の松本恭幸ゼミと協力しあうこととなった。当時、松本恭幸ゼミは被災地のコミュニティメディア調査を行っていたからである。地球対話ラボの「いま私たち市民にできることプロジェクト」への参加やいわき市、南相馬市、山本町のコミュニティメディア調査など、本授業と松本恭幸ゼミとの共同活動の一部は松本（2013）に掲載され

ている。共同活動は地域学習支援実習と完全に重なっていたわけではなく、2012年7月10日にはゼミとしていわきで「いわき子どもを守るネットワーク」の共同取材を行っている。また、2012年度の地域学習支援実習（コミュニティメディア班）の受講生は全員がゼミ生であった。ただし、このようなケースはこの年だけであり、2013年度以降、坂本ゼミ生は「地域学習支援」を履修していない（逆に「地域学習支援」を履修した学生が坂本ゼミに入った事例は存在する）。

2013年度と2014年度も松本ゼミと協力しているが、松本ゼミの被災地における活動は2014年度で終了したため、2015年度以降は坂本ゼミ単独の活動となる。また、2014年度は毎日新聞社との協力を開始した。この年に川内村を実習場所にしたのは、毎日新聞社からの紹介による。毎日新聞社と協力することになったのは、2015年度、同社と文科省ユネスコ国内委員会補助金「グローバル人材育成をめざした福島原発被災地域におけるメディア活用型ESD地域学習支援モデルの創造」を共同申請し、採択されたためである。この事業により、福島ESDコンソーシアムを設立し、福島県内各地のユネスコスクールやユネスコ協会のネットワークを構築し、ユネスコのメディア情報リテラシープログラムを活用して海外の学校との異文化交流実践を進めることになった。その中心となったのは須賀川市立白方小学校とネパールの小学校とのビデオレター交流である。坂本ゼミもこの活動を推進するため、白方小学校やいわき市立四倉小学校での授業支援を実施し、四倉小学校での授業支援はNPO地球対話ラボと協力しながら地域学習支援実習にも組み込んでいる。ただし、白方小学校での授業支援についても数多くの映像を制作しているが、本稿で紹介する映像作品には含まれていない。

「地域学習支援」を担当していた佐藤一子は、2015年度をもって定年退職したため、佐藤が石巻で実施していた地域学習支援実習の一部を筆者の実習に組み入れることになった。その結果、2016年度より実習範囲は宮城県石巻市から福島

県いわき市まで拡大した。実習日程も2泊3日から3泊4日に伸ばすことになった。協力団体もNPO 地球対話ラボ、宮城県青年団連絡協議会以外に広野中学校で毎日新聞社と協力しながら映画制作を行っていた社団法人リテラシーラボ、福島大学との協力関係を形成していったのである。

## 2. 映像制作の意味とその変化

坂本ゼミ・地域学習支援実習受講生が制作した映像作品は、時とともに変化している。震災直後こそはボランティア活動が目的だったため、取材は行っていないが、2012年度からは学習活動の一環としての取材を始めている。当初、原発周囲20キロ圏内は立ち入りが禁止されており、その周辺地域は津波の被害がそのまま残されていた。当初はコミュニティメディアへの取材が中心であったが、とりわけ学生たちが関心を持って取材したのは仮設住宅や住民の生活、教育の現場であった。それはキャリアデザイン学部の特性を表しているとも言える。そのため、南相馬の小学校や仮設住宅など、単独で取材することもあった。福島第一原発のそばを通る国道6号線の一般通行が可能になったのは、2014年9月15日である。翌年から実習も国道を通過して北上、もしくは南下するルートを利用することになった。

復興が進むにつれて、災害直後に作られた応急仮設住宅から復興公営住宅への住み替えが進んでいく。取材対象もこうした復興の進展とともに、住民の日常生活や復興への取り組み、震災記憶の伝承へと変化していった。また、震災記憶の伝承や復興教育に取り組む学習支援活動を取材するようになっていった。当初の「コミュニティメディア」重視からより地域学習支援重視へと変わっていったのである。それは復興の進展によって、一見して被災地だとわからなくなっていったこととも関係する。

さらに、映像制作の仕方も徐々に変わっていった。取材者自身もまた取材対象になっていったことも大きな変化の一つである。地域学習支援実習

はいくつかの班に分かれて、それぞれの施設でインターンシップを実施する。そして12月にそれぞれの班が発表会で成果のプレゼンテーションを行う。コミュニティメディア班は坂本ゼミの支援を得て映像を制作し、プレゼンテーションの一環としてその映像を上映した。プレゼンテーションの時間に合うように毎年15分程度の長さの映像にする必要があった。この発表会で必ず聞かれる質問の一つが、実習生が被災地で何を感じ、何を学んだのかという問いであった。

写真2は、2014年度の地域学習支援実習受講生が授業中に書いたメモである。実習が終了すると、撮影した映像を簡易編集する。そのようにしてできた映像をラッシュと呼ぶ。ラッシュを受講生全員で視聴し、それをもとに制作する動画のストーリーラインをディスカッションしながらまとめ上げていく。このメモには「どのような思いで現地に行き、何を感じたのか」、「一視聴者として一般市民として本当に知りたいことは何か。取材される側が本当に伝えてほしいことは何かを考え、現地に向かった」と書いている。そして震災報道を批判的に考察し、「本当に伝えなければならなかったことは何だったのか」と自問している。教育の場で映像を制作するということは、ホームビデオのように単に撮影した映像を鑑賞することが目的ではない。重要なことは、映像視聴とは体験の批判的な振り返りであり、映像編集とは他者に伝えるべきメッセージの探究だということである。そのプロセスの中で、大手メディアによる報道と自分たちが伝えるべきメッセージを比較する。報道は都合の良い部分を切り取るが、同時に自分たちのメッセージもまた同じように編集され、構成されていることを映像制作を通じて理解することになる。

地域学習支援実習における映像制作は、被災地に行ったことがないキャリアデザイン学部の学生を視聴者として想定し、被災地での実習で知ったこと、感じたことを伝えることを目的とした。しかし、実習生の意識の変化が問われるのならば、単に、取材対象へのインタビューを行うだけでは

どのような思いで現地へ行き、何を感じたのか  
ストーリー (15分) ... 自然 写真、  
真摯な (最後は中学校の話を  
レジョンしている)

地域学習支援

インビ-を使か  
どこを使うか 1426 10 17

東日本震災で原発事故が起き、避難指示区域の住民は、  
全員どこかへ避難し暮らしている。この報道は、しかし事実を  
伝えている。だが住民はどこでどのような暮らしをしているのか、  
住居、金銭面、人々の気持ちなど具体的なことは触れていない。  
私は震災や津波の映像、被害者数、復興支援をただ繰り返し、  
同じような放送しつづけるメディアに疑問を抱いていた。  
被害の大きさはかきを強調し、実際に起きていることを正面から  
向き合、て報道しているのかと疑問だったのだ。特に放射能被害は  
「基準値」の安全基準は何かを私たちはほとんど知らない。しかし、  
毎日のように原発区域の農産物の放射能被害を「基準値を  
大きく上回る」と情報を投げかける。私たちは東北産の食べ物  
買わなくなっていくのだ。ある地域限定で買わないのではなく、  
東北全般のものを遠ざけていく。まるでメディアに操られている  
かのようなのである。

一視聴者として、学生として一般市民が本当に知りたいことは  
何か、取材される側が本当に伝えてほしいことは何か、を考え、  
探すために現地へ向かった。福島県川内村には豊かな自然が  
広がっていた。そこで生きる多種多様な生物は震災前とおそらく  
変わっていないだろう。避難指示が解除され、戻ってきた住民のうちも  
まだ戻れない人も以前と変わらない暮らしを願っているだろう。

実際の報道と比較 震災直後から変化していく報道  
(地震津波の映像→原発事故→放射能被害)  
大きく分けると3段階ある。ある段階を報道しているときは、  
それだけを強調。事実と異なっているも、報道する材料は都合の良い  
ようにセリ取る。  
そのときどきに本当に伝えなければならなかったことは何だったのか  
時系列にまとめていく。

なく、自分たち自身の変化の記録が必要である。取材者は取材対象者に対して、客観的立場に立つ第三者ではなく、地域に関わりを持ち、そこで何かを感じ、行動する自覚的な主体である。その行動の記録自体が重要なのである。とりわけ、人のキャリアを学び、キャリア形成や学習の支援をめざすキャリアデザイン学部の趣旨からすれば、この視点は重要である。筆者は坂本、寺崎、笹川(2019)で「他者を取材対象とするドキュメンタリーにセルフ・ドキュメンタリーの要素を付加させた「体験の言語化・映像化」と呼ばれるコンセプト」を提起した(坂本、寺崎、笹川 2019: 50)。そして、次のように書いている。

ドキュメンタリー映像に取材対象者自身が登場し、そこで感じたことを言語化するシーンを挿入することにした。一見すると、セルフ・ドキュメンタリーに見える。あるいは、ドキュメンタリーのメイキング映像のようにも見える。この試みを全面的に実施したのは2017年度「地域学習支援実習」コミュニティ・メディア班による宮城・福島取材であった。学生たちは意図的にお互いに取材するシーンやその場で感じたことをインタビューし合うシーンを撮影して作品を制作した。この作品は2017年12月10日に平塚市で開催された「湘南ひらつかメディアフェス」で参加学生自身によって上映報告された。さらにこの手法

は同年 12 月のカンボジア海外研修時のカンボジア・メコン大学とのドキュメンタリー協働制作にも使われた。「体験の言語化・映像化」は市民ジャーナリズムとセルフ・ドキュメンタリーの両者の特徴を取り込んでおり、自己表現と同時に社会との関係そのものを明示的に表現することをめざした映像制作手法であるといえる。(坂本、寺崎、笹川 2019: 51)

このような特徴を示す作品は 2017 年度以降に増えていった。写真 3 は 2017 年度作品「私たちの震災リアル」の一画面であるが、学生が学生にインタビューをしているシーンである。このカットの次に左の学生のカメラのショットへと変わる。つまり、この場には 2 台のカメラがインタビューを撮影しており、このショットはインタビュー取材を撮影したものだということがわかる。学生が学生をインタビューし、その様子を撮影するのは、自分たちの活動そのものを映像にしようと考えていたからである。このようにしてできあがった作品は、セルフ・ドキュメンタリーの要素を持つことになる。このような撮影手法を用いることで、実習によって何を感じ、何を考えたのか、リアルタイムに記録することができるようになる。ゼミ生がこの手法を意識化して作られ

た作品がある。写真 4 は学生研究発表会用にゼミ生が作成した「カンボジア研修」(2017) であるが、ここにもよく似たシーンがある。この作品では、ゼミ生は自分たちの映像手法を「体験の言語化・映像化」と呼び、その手法を解説している。単なる映像化ではなく、言語化と呼ぶのは、現場でのインタビューとともにナレーション原稿の執筆が必要だからである。写真 5 は全国的なコミュニティメディア・フェスティバルであるメディフェスで上映された映像「メディフェス 2019 (石巻編)」であるが、大川小学校跡で学生が感じたことをその場でインタビューしていることがわかる。声にならない声をインタビューによってあえて言葉で表現させているのである。

このようなセルフ・ドキュメンタリー的な手法の導入は、大手メディアのドキュメンタリーとの対比で考えれば、その意味することは明確であろう。大手メディアが報道として視聴者に見せる映像には、一般的に制作主体を意識させない。制作主体と取材対象との相互交流や葛藤、制作主体の意識の変化を意識的に残そうとはしない。しかし、「体験の言語化・映像化」手法はそれとは逆に積極的に制作主体の意識の変化を表現しようとする。このことは、よくありがちなテレビ局や映像専門家による学校への映像制作ワークショップ支

写真 3 「私たちの震災リアル」(2017)



もし自分がペットを飼ってて犬を連れてこれなくて戻りたくない気持ちっていうのもすごいわかったし

写真4 「カンボジア研修」(2017)

体験の言語化・映像化 <https://youtu.be/VtTnWvlHEHo>



写真5 「メディアフェス2019(石巻編)」(2019)



援とは一線を画す。プロの映像のモノマネではない、自分たち自身の自分たち自身による映像制作こそ、教育的価値があるという立場に立っている。

学生たちにとっては4年間で1回の経験に過ぎなくても、ゼミとしては9年間の積み重ねがある。ゼミの活動としては決して被災地調査だけを行っているわけではなく、海外研修は2005年度から実施しており、2019年度からは沖縄研修も始めている。これらの研修でも映像制作を行っ

ている。9年間にわたる宮城・福島取材映像作品は、これら学生たちが制作した映像作品の一部である。また、地域学習支援実習成果発表会の発表時間が20分に限られていたため、作品は15分という制限があった。2017年度以降は地域学習支援実習の発表方式がポスターセッションに変更になった。この年は地域学習支援実習として、ポスターと映像制作の両方を行ったが、翌年度から負担が大きいため、ポスター制作だけを行っている。

すなわち 2018 年以降はすべてゼミ活動として制作した映像作品である。ゼミ活動として制作した映像作品は年度終わりに開催される学部学生研究発表会で用いられた。ただし、すでに述べたように、海外研修や沖縄研修でも映像を制作しているため、被災地取材に関する映像は短く少ない。撮影する映像の量に違いはないが、2016 年度以降作品の数が減少している。坂本ゼミの活動が多面にわたり、地域学習支援実習の映像制作に注力する時間が少なくなったことが背景にある。実際には映像作品の形になっていない未公開のフッテージ（撮影されたショット）が大量に存在する。その中には貴重なインタビュー映像もあり、こうしたフッテージそのものをアーカイブ化し、それを用いて新しい作品を作ることも可能である。そのためにも撮影されたすべての動画のアーカイブ化が必要になるだろう。

さて、冒頭で触れたように、2020 年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、坂本ゼミは宮城・福島実習を行うことができなかった。地域学習支援実習はそれにかえて須賀川市立白方小学校で開催された授業発表会に参加することになり、その成果をポスターにまとめた。人数制限があったため、坂本ゼミ生は授業発表会に参加することができなかった。こうした事情から、ゼミ生は過去の映像作品を視聴し、その成果を武蔵大学の白雉祭で発表したのである。では彼らは過去の映像から何を見出したのだろうか。下の二つの文章は白雉祭で報告した 3 年生による文章である。

#### ①前半（2011～2015 年度）

坂本ゼミに残る、東日本大震災の映像アーカイブのうち前半（2011 年～2015 年）を視聴した。前半の映像は、震災の爪痕が深く残っているのが印象的である。積み上げられた瓦礫や津波の影響をうけたままの不自然な建物の中で暮らしている人々と出会い交流している様子が生々しい。震災の前の街の姿への思いを馳せ、昔はどんな街だったのかを語ってくれる人々の姿が目立つ。

震災発生から時間が経っていないこともあり、国や役所に対する不満をこぼす方や矛先の見当たらない怒りをあらわにする様子が映し出され、私たちが本当に知るべき被災地の様子は「どのくらい復興したか」ではなく「何に対してどんな思いを抱いているのか」ということだったのだと感じた。また、震災当初から取材を続けてきた学生たちに対して心を許して取材に応じてくれた教員や、信頼しているからこそ「東京に殺されたと思っている」「東京のひとには何にも届かない、響かないんだ」と語ってくれた方がいた。

当時の状況だからこそ生み出された感情や言葉、様子は重たく、再現できない独特の価値があると感じた。映像がアーカイブされて当時のまま形に残っていることで、当時の記憶が蘇り、それを現代の人に届け、見返し、後世に残すことで新たな気づきや考えが生まれると考えさせられた。（井関愛美）

#### ②後半（2016～2019 年度）

過去の映像を視聴してわかったことは 2 つの変化である。1 つ目の変化は取材対象の変化。震災直後の映像では「震災の爪痕」を記録したものが多かった。しかし、その後は仮設住宅で暮らす人への取材といった「被災した人々の生活」に焦点を当てるものが増えた。そして、復興が進んでくると南浜つなぐ館のような「震災を伝える活動」が対象となり、最近の取材では、福島大学のふくしま未来学を取り上げたように「教育」へと取材の対象が変わっている。

2 つ目の変化は取材目的の変化である。取材を始めたころは、被災地の現状を「知る」ことが主目的となっていたのだが、その後、これらの現状を「伝える」ために取材を行なっている様子が見られる。そして、復興の進行とともにゼミで学んでいる映像メディアを活用した支援をする。つまりこれらの技術を「教える」ことが大きな目的になっている。これ

らの目的を経て最終的には震災の記憶を風化させないためには自分たちに何ができるのかを「考える」ことを目的に取材を行っている。

過去の映像の中にはこのような2つの変化が見られた。この変化からは、年月、そして復興が進むにつれて、被災地だけでなく、取材する側の意識も変化しているということが読み取れる。(中山賢吾)

この二つの文章から何を読み取ることができるだろうか。前半の映像からは、取材主体ではなく、取材対象の発言や震災の爪痕の状況を読み取って感想を書いていることがわかる。一方、後半の映像からは前半の映像とは異なる二つの変化を読み取っている。一つの取材対象が「震災の爪痕」から「被災した人々の生活」へと変わっていったことである。もう一つは取材目的が「伝える」ことから「考える」ことへと変化していったことである。この気づきは、映像制作手法の変化がもたらしたものだと考えられる。映像が「考える」ことを目的にすれば、見る側にも「考える」視点を提供することになる。そこには結論はなく、何を考え、何を見出すか、それらは見る側に委ねられる。映像制作の目的は、「伝える」ことだけではない。同時に「考える」ことをメッセージとして含むものでなければ教育的価値のある映像制作とはいえないのである。

## まとめ

本稿は東日本大震災から10年目に当たる2021年に、過去9年間の坂本ゼミ・地域学習支援実習(コミュニティメディア班)による映像作品を再視聴することを通して、映像制作の意味を検討するものであった。しかし、より重要なことは、こうした過程をへて被災地で実習を行うことの意味を問うことであろう。もし、実習が被災者へのインタビューや施設の見学だけで終わるならば、実習参加者に「感想」以上のものを生み出すことはできないだろう。学習者としての映像制作者は決して観察者としての第三者ではなく、取材対象と人間関係を生成し、場を共有する変化主体でなくてはならない。そして同時に、マスメディアによって自己の中に作られてきた印象を対象化し、本当に伝えるべきメッセージとは何か、探究しなくてはならない。映像制作は学習の方法や結果ではなく、学習の過程である。

2020年度のゼミ生たちは9年間の映像の視聴を通して、こうした変化をクロニクルとして考察する機会を得た。彼らは確かに現地で実体験することができなかったが、映像によって追体験することができたと言えるのではないだろうか。この経験から言えることは、新型コロナウイルス感染症パンデミック後であっても、こうした学習を通常の学習に組み込むこと、そして今後は映像アーカイブの構築を意識することである。それは、過去の学習成果の蓄積だけではなく、過去の学習の追体験を可能にするとと言えるだろう。



## 資料 1 宮城福島実習日程記録

### ① 2011年度

2011年7月2日、8月28日、12月2日、2012年1月26日

宮城県亶理町立中央児童センターでの子どもたちへの支援

映像作品：

「亶理町 サンバナ1日」「特別な夏～相双連合野球部の挑戦」

### ② 2012年度

協力：松本ゼミ

日程：

7月10日 いわき子どもを守るネットワーク

9月6～9日 みなみそうまチャンネル、南相馬ひばりエフエム、南相馬 UST 生中継  
南相馬市立高平小学校、亶理町仮設住宅職員

映像作品：

「宮城県亶理町公共ゾーン 仮設住宅で働く人の眼」「仮設住宅インタビュー」

「福島への旅 南相馬から亶理へ」「まさかの中の子供たち」

「南相馬仮設住宅生中継」「南相馬ひばりエフエム」「福島の今、現実～3.11が変えた町」

### ③ 2013年度

協力：松本ゼミ

日程：

9月6日 名取市「なとり災害FM」、南相馬市原町高校放送部

9月7日 南相馬ひばりエフエム

「デイサポートセンター・ぴーなっつ」

9月8日 山元町「りんごラジオ」、名取市「閑上復興だより」

映像作品：

「南相馬からの報告～普通じゃないけど普通の日常」「南相馬からの報告（公開用）」

### ④ 2014年度

協力：松本ゼミ・毎日新聞社

日程：

9月3日 松本ゼミと交流

9月4～5日 川内村の魅力と問題を調べよう

あぶくま農場、長福寺、平伏沼、川内小学校、川内中学校、大智学園高校、かわうち保育園、  
上川内郵便局、交番、仮設住宅、農産物栽培工場 fukufarming、天山文庫、阿武隈民芸館

映像作品：

「川内村を訪ねて」「川内村を訪ねて（上映用）」

### ⑤ 2015年度

協力：毎日新聞社

9月1日 NHK 番組収録「復興サポート 村に楽しみの中をつくろう～福島・川内村」参加

9月3日 広野町役場教育委員会、ふたば未来学園高校、福島大学サテライト事務所

9月4日 川内村コドモエナジー、風見正博（浪原人村）

3月19～21日、6月5～6日も福島取材実施

映像作品：

「福島浜通り・人々の生活」「フラダンス川内村」

#### ⑥ 2016年度

協力：地球対話ラボ・宮城県青年団連絡協議会

8月20日 石巻被災地・大川小学校跡

8月21日 宮戸島ワークショップ（地球対話ラボ）、南相馬小高地区（野馬土）、いわき市立四倉小学校

坂本とゼミ生2名は9月にインドネシア・アチェ実習に参加

映像作品：

「石巻から福島へ そしてアチェの若者と子どもたち」

#### ⑦ 2017年度

協力：宮城県青年団連絡協議会、地球対話ラボ

9月2日 石巻被災地・大川小学校跡

9月3日 東松島伝承館、富岡町さくらモール富岡、川内村

9月4日 いわき市立四倉小学校授業支援

映像作品：

「私たちの震災リアル」「地域学習支援実習（石巻）」

#### ⑧ 2018年度

協力：リテラシーラボ、地球対話ラボ

9月11日 カタリバへのインタビュー

9月12日 広野町立広野中学への授業参加と取材

9月13日 浪江まちなみまるしえ、富岡町311を語る会取材

9月14日 四倉小学校授業支援

映像作品：

「四倉小学校」

#### ⑨ 2019年度

協力：福島大学、宮城県青年団連絡協議会

9月6日 四倉小学校授業支援

9月7日 福島大学ふくしま未来学（川内村）プログラムへの参加、福島大学教員学生取材

9月8日 石巻市被災地、石巻市立大川小学校跡

制作映像はメディアフェス2019で上映・発表（11月23日）

映像作品：

「福島大学インタビュー」「石巻インタビュー」「メディアフェス2019」

## 資料2 制作映像作品の解説

下の映像解説には、発表会などで使用した作品だけではなく、作品の元になったインタビュー等の記録動画も含まれている。また、URL 記載のないものは一般非公開である。

年度	映像情報	解説
2011	タイトル： 亙理町サンパな 1日 撮影日：7月 2日 制作：田邊美樹 取材場所： 宮城県亙理町中央児童 センター 動画：11分 13秒 執筆者：井関愛美	<p>「勝手に義援隊」として訪れた宮城県亙理町と町立中央児童センターでのゼミのボランティア活動の様子を撮影した記録映像である。山間を抜けて海沿いに出ると、街には地震の爪痕が深く残り、崩れた家などの瓦礫がそこら中に積み上がっている。まだ、整備は進んでいないように思える。校舎の壁には浸水した痕が生々しく残っているのが見える。この動画は、そのような状況下で訪れた町立中央児童センターで被災した子どもたちと触れ合った様子を記録として残したものである。</p> <p>子どもたちの年齢は様々で、幼稚園児くらいから小学校中学年くらいまでの子どもが参加している。お揃いのポロシャツを着用してもらい、法政大学の学生と音楽や体を使ったゲームでの交流を行った。多くの子どもたちが積極的に参加してくれるように見えるが、緊張した様子で深割とした笑顔が見えなかったり、部屋の角から出てこれなかったりする子どももいる。東日本大震災が子どもたちの心に与えた衝撃の大きさが目の当たりになった瞬間である。</p> <p>最後には、中央児童センター全体でサンパを踊って交流を深めた。身近に目にするものがないサンパ衣装や踊りに夢中になり、自然と笑顔溢れ出す子どもたちの姿は印象的だ。時間をかけて子どもたちに声をかけて交流することで、彼らは学生に対して心を開いてくれたようだ。「亙理町サンパな 1日」は動画として公開するために作成されたわけではなく、あくまでも関係者用として7月の交流の様子を動画にまとめたものである。</p>
2011	タイトル： 特別な夏～相双連合野 球部の挑戦 制作者：服部鮎美 撮影日：n.d. 取材対象：相双連合野 球部 動画：29分 24秒 執筆者：坂本旬	<p>本作品は服部鮎美による卒業制作である。震災と原発事故のため、富岡高校、双葉翔陽高校、相馬農業高校は単独で夏の高校野球に参加することができず、服部芳裕監督率いる相双連合野球部として参加することになった。震災直後から部員たちは避難生活を余儀なくされ、困難の中で練習を続けた。この作品は、ピッチャーになった双葉翔陽高校の林優太郎を主人公に、数ヶ月をかけて現地に通いながら撮影して作られた。最後には福島県大会の試合となり、感動的なシーンで映像は終わる。当時の被災地に生きる若者たちと彼らを取り巻く大人たちが高校野球にかける思いが映像から伝わってくる。インタビュー・シーンから制作者と取材対象者が時間をかけて信頼関係を築いていたことがよくわかる。</p>
2012	タイトル： 南相馬仮設住宅生中継 制作者：地球対話ラボ・ 坂本ゼミ 撮影日：9月 7日 取材対象： 福島県南相馬市住民 動画：1時間 27分 執筆者：坂本萌々	<p>NPO 地球対話ラボによる「いま私たち市民にできることプロジェクト」の一環として南相馬市の仮設住宅で行ったオンライン放送の中継動画記録である。被災当時、南相馬市民はまったく情報がなかったという。市役所から届く情報も次第に少なくなった。原発の近くに避難してしまった人もいた。避難生活では、お風呂に中々入れなかった。7日ぶりに入ったという人や20日間入っていないという人もいた。パンツも1枚しか支給されず、一回しか履き替えられなかった。過酷な避難生活を送った。SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予想）の公表がなかったため、被ばくした人も多くなったと思われる。新潟に避難した人もいた。3月で寒かった東北は避難生活も大変であった。着替えもなく、買い物するにも不便だった。不便さというより、不安が募り、苦痛で気が滅入る毎日だった。南相馬から離れて11月まで夫婦離れ離れで非難することになった人もいた。障がい者にとっては避難生活はより大変であった。避難生活の中でも、楽しむことを忘れずにポジティブな気持ちを持つようにすることで、苦しい現実を乗り越えられたという。</p> <p>仮設住宅の生活では、ラジオ体操や、知らない人との出会いもあり、人とのつながりの楽しさを感じられたという。原発の爆発によって、避難した後も戻ることが出来ず、知り合いとの生存確認も携帯がつながらず、1週間以上なかなか安否を知ることができなかった。原発事故による魚や野菜の風評被害も大きかった。検査で基準値を下回っていても、安全性に不安を感じる人が多いことも現実である。家に帰ることができないのも深刻な問題である。6万人の人がいまだに家に帰ることができない。故郷がもとに戻らないと個人で帰っても、近所の人が帰っていない状況での生活はつらい。自分たちの生活を確保しながら、生きていくことを考えると、何年先かも分からない帰宅を待つことはできないという人も多い。特に、小さな子どもがいる家庭や、若い世代は、地元にもう戻らないという人が多く、復興が終わった後にも、街に活気が戻らないのではないかと不安も大きい。</p> <p>また、子どもたちのストレスも計り知れない。市役所からも、具体的な案が示されない中で、学校も開校されず、帰りたいという気持ちがあっても、どこに住めばいいのかわからない家庭も多い。さらに、仕事がなく帰ることもできない家庭もある。一方で、帰りたい子どもの気持ちと不安を抱える保護者の気持ちがあつまって、悩んだ挙句、子どもたちの気持ちを尊重したうえで、帰ってきた家族もある。さまざまな問題に毎日向き合わなくてはいけないという。</p>

年度	映像情報	解説
2012	<p>タイトル： まさかの中の子供たち 撮影日：9月7日 制作者：海老原侑子、 大内亜美、梶山祐紀、 田中美帆、田邊美樹 取材対象：福島県南相 馬市立石上第二小学校 長・高平小学校長 取材場所：高平小学校 動画：9分34秒 執筆者：坂本萌々</p>	<p>東日本大震災で大きな被害を受けた福島県南相馬市。もちろん子どもたちも例外ではなかった。石上第二小学校と高平小学校、それぞれの校長から震災当時の様子や、現在も小学生たちが抱える震災が残した爪痕をインタビューしている。</p> <p>震災当時は5校時で、子どもたちが授業を受けていたり、校庭で遊んでいた時に揺れが起こったという。震災後、原発事故の影響で南相馬市を離れた保護者300名に行われた意向調査では、意見が三分され、3分の1は迷っている、次の3分の1は帰ってもいいが、もう少し様子を見たいと答え、残りはもう帰ることはないと言った。3月11日を境に、バラバラになってしまった子どもたち。町を出ていった家族の子どもたちも各地区の学校に行き、周辺環境には慣れたものの、転校先でいじめにあうことや、以前と同じ学校に通い、遊んだり、学んだりしたかったという声もあがっていたという。また、転校先の環境に順応できずに、不登校になってしまい、地元に戻りたいという子どもたちの願いと、放射線の危険性を危惧する保護者の心配との折り合いをつけ、戻ってくるといったケースもあった。しかし、震災後は地元の子どもたちも3校合同での学校生活を送っており、さまざまなストレスを抱えていた。運動不足、慣れないスクールバスでの通学、他校の子どもたちとの交流、保護者のストレスによるストレス、ストレスを訴えることができる担任がいらないことなど問題は多岐にわたった。9か月間に及ぶ3校合同学校生活が終わった後は、広々と教室が使える元の生活に近づき、喜びを感じたという。</p> <p>しかし、放射線の心配は残った。子どもたちが過敏になっているというわけではないものの、放射線数値は保護者を安心させるために必要不可欠なデータであった。学校から帰った後はほとんど外で遊ばなくなった子どもたち。除染作業は公共機関外ではまだほとんど進んでおらず、不安を抱える日々が続いていた。自然災害の恐ろしさと同時に、生活をよりよくするために作られたはずの原発の在り方についても考えさせられる機会になっていると石上第二小学校校長は語った。未だに問題も多く抱えながらも、防災訓練に力を入れるなど新しい取り組みも始まっている。学校も、完全な復興を目指して、一步一步進んでいたのである。</p>
2012	<p>タイトル： 宮城県亶理町公共ゾーン 仮設住宅で働く人の眼 撮影日：9月6～9日 制作者：海老原侑子、 大内亜美、梶山祐紀、 田中美帆、田邊美樹 取材対象：亶理町仮設 住宅職員の渡辺さんと 桜井さん 動画：10分56秒 執筆者：坂本旬</p>	<p>本作品は宮城県亶理町の公共ゾーン仮設住宅を取材したものである。冒頭、学生の「立ちレポ」と呼ばれる、マイクを持ってカメラに向かって語るシーンから始まる。作品の中心は仮設住宅で臨時職員として働く桜井さんと東京から派遣された渡辺さんへのインタビューである。</p> <p>桜井さんもまた被災者であり、災害時の体験から話は始まる。彼は母を避難所に届けてから自宅の様子を見に帰った際、津波に襲われる。なんとか逃げることができ、無事に避難所にたどり着く。興奮状態だったため、当時の記憶があまりないという。その後、仮設住宅の臨時職員となり、開設当初の体験談が続く。当時は被災者もいらいらし、暗い雰囲気だったという。誰もが何をしたいのか、どこに行けばいいのかわからなかったという。</p> <p>2011年7月に中野区から派遣された渡辺さんは被災していない立場から亶理の復興のために仕事をしたいと語る。法律の不備によってどうしても救えない人がいるという。住民からはどうしてできないのかと問われ、国の制度でできないと答えなくてはならないこともあると語る。インタビューからその葛藤を見ることが出来る。</p> <p>インタビュー映像の途中で、学生たちは渡辺さんに仮設住宅を案内されるシーンが挿入される。住民から荷物を置く部屋や男女が一緒にならないよう部屋を分けてほしいと言ったさまざまな要望があるという。渡辺さんは優先度を考えながら対応していると語る。</p> <p>映像は再びインタビューに戻る。桜井さんは亶理町荒浜が嫌いで東京に出たが、仮設住宅で子どもたちと出会い、荒浜が好きになり、この仕事が終わってもずっと居たいと思うようになったと語る。渡辺さんは亶理町の職員の中には家族を震災で失った人もいるのに頑張っている姿を見て、覚悟を持って仕事をしていると感じたという。そして、東京に戻ってからも覚悟を持って仕事をしたいと語る。桜井さんは何も言えないまま亡くなってしまった友人のことを思い起こし、言いたいことははっきりいうこと、感謝の気持ちを伝えること、そして熱い男になりたいと話す。</p> <p>学生は被災地がどう変わってほしいかと尋ねる。渡辺さんは仮設住宅ではなく、自分たちで住めるような場所を見つけてほしいと答える。一方、桜井さんは荒浜に戻ってきてほしい、元の景色に戻ってほしいと答えた。最後に学生は、東京の学生へのメッセージは何かと問いかけた。そして東京と被災地との空気の違いについて語る。2万人がなくなったことを忘れないでほしい、同じことが自分にも降りかかるかもしれないことを考えてほしい、この経験を生かしてほしいという。桜井さんは、友達と家族、故郷を大事にしてほしい、嫌なことから逃げないで最高の学生生活を送ってほしいと答えている。仮設住宅は2年後になくなってしまふ。学生たちは、亶理町はどのように変わっていくのだろうかと投げかけて作品は終わる。</p>

年度	映像情報	解 説
2012	タイトル： 亙理町仮設住宅インタビュー 動画：54分02秒 執筆：坂本旬	作品「宮城県亙理町公共ゾーン 仮設住宅で働く人の眼」の元になったインタビューの全記録。東京から派遣された渡辺さんと臨時職員の桜井さんの話は、被災地で働くことの意味を私たちに突きつける。貴重な記録である。
2012	タイトル： 福島への旅 南相馬から亙理へ 撮影日：9月6～9日 制作者：坂本旬 動画：4分45秒 執筆：坂本旬	デジタル・ストーリーテリングの形式で作られた作品。実習中に撮影された静止画像にナレーションをつけてどのような活動を行ったのか、わかるように作られている。この作品はデジタル・ストーリーテリングの方法を学生に教えるために、あえてiPadだけで実習中に制作されており、同じ題材を用いつつ、一般的なドキュメンタリー作品との制作方法や作品から伝わる印象の違いを実感することができる。これによって、スマートフォンしか持っていない映像制作初心者でも、記録映像を制作できることを理解させることができる。
2012	タイトル： 福島の今、現実～3.11が変えた町 撮影日：n.d. 制作者：大内亜美 取材対象：福島県いわき市 動画：15分21秒 執筆：坂本萌々	大内亜美による卒業制作作品。2011年3月11日の東日本大震災で被害を受けた福島県いわき市。震災から二年経った今でも残る傷跡があった。浜辺に位置し、津波の被害が大きかったいわき市久之浜。よつくら港情報館の坂井氏は、大地震に加えて、津波、火事、原発が久之浜を襲ったと話した。原発の風評被害は今なお、現地の人を苦しめている。それでも、生きていくために、ボランティアの力も借りて大部分の瓦礫は片づけられ、震災でなくなってしまった商店街の代わりに、浜風商店街という仮設商店街が作られ、復興に前向きに取り組んでいる。たとえ、今すぐ元の生活に戻ることができなくても、いつか安心して若い人たちに戻ってきてほしいと願いながら、久之浜は今も復興に向けて歩んでいる。 津波によって莫大な被害を受けた海と魚のテーマパーク、いわき・ら・ら・ミュウ。2011年11月25日にリニューアルオープンして以来、多くの人で賑わっているが、提供する魚や野菜には福島県産のものはない。小さい子どもには安くても福島県産のものは食べさせないという保護者の苦情があるため、県内産・地元産は使わないという小学校の校長の話も聞く。遊ぶ場所についても、家庭に帰ってからは放射線の心配があるため、公園などの野外ではなく、屋内で遊ぶことがほとんどだという。いわき・ら・ら・ミュウ内にも、屋内型テーマパークができ、連日賑わっており、保護者にはおもしろい遊んでほしいという思いがある。 いわき市豊間の浜辺には福島県に発生した瓦礫の6割が集まっている。しかし、焼却処分が行われたのは1割程度である。瓦礫処理が進まない原因は4つある。仮置き場が満杯になってしまっていること、放射性物質への不安、住民の理解を得ること、そして呼吸器への問題が挙げられている。瓦礫の受け入れを断る自治体や反対する住民が当たり前のように、瓦礫と隣り合わせて生活を送る人々が当たり前にいる現実を忘れてはいけない。 震災から2年経った今でも、福島県にはいたるところに震災の爪痕が残されている。しかし、簡単に解決することの無い問題を抱えた福島県には、その問題に負けることなく、感謝の気持ちを持って前向きに復興に取り組む人々の姿がある。
2013	タイトル： 南相馬からの報告～普通じゃないけど普通の日常 撮影日：9月6日 取材対象： 南相馬市内の施設・学校関係者 動画：16分18秒 執筆：鈴木真凜	本作品は震災から2年後、2013年9月に南相馬市に訪れたときの取材内容をまとめたものである。この映像を作るきっかけとなったのは、南相馬市内に位置する県立原町高校を卒業した高山さんとの出会いであった。当時放送部員だった彼女は、当時の様子を後世に語り継ぐために記録し、大学の授業で一つのDST（デジタル・ストーリーテリング）を作り上げた。 今回のインタビューの対象者は、放送部員の生徒と顧問の教諭である。生徒たちに、作品を通して伝えたいことを伺ったところ「原発から一番近い場所で真実を伝え続け風化を防ぎたい」「全国の人が考える南相馬市と自身の思う南相馬市のギャップを無くしていきたい」「かわいそうじゃない、マスコミが伝えられない真実を伝えたい」と話していた。顧問教諭も「当時は今後どうなるかわからない不安でいっぱいだった、でもジャーナリストの端くれとして何もしないわけにはいかない」という思いで、部員たちに映像制作の指示を出したのだという。加えて、南相馬市で生きていくうえで必要な事は、「普通だけど普通じゃないという言葉で日常として受け入れていく」ことだと話し、「思い入れ等で町を離れられない人達のケアをしてほしい」という願いも同時に伝えている。 彼らの活動や当時の状況がNHK「クローズアップ現代」で取り上げられることとなったが、それを通してメディアの報道の在り方に疑問を覚えたと話している。顧問教諭は「メディアは、味方であり敵でもある、情報の見極めが重要である」と訴えた。 (原町高校以外の内容は公開用参照)

年度	映像情報	解説
2013	<p>タイトル： 南相馬からの報告（公開版） 撮影日：9月6日 制作者：石津愛里、高橋果琳、中澤那綾、西村愛、高橋奈那、辻元 気 取材対象：南相馬ひばりエフエム、ディサポートセンター・ぴ〜なっつ 動画：9分15秒 <a href="https://youtu.be/NDhu3L2S5io">https://youtu.be/NDhu3L2S5io</a> 執筆者：ソウ・ギョウセン</p>	<p>非公開版「南相馬からの報告」から原町高校取材部分を削除して、公開可能にした作品である。震災後、住民に正確な災害情報を提供することを目的に、東日本では多くの臨時災害FMが設立された。南相馬市では「南相馬ひばりエフエム」が設立され、災害情報だけではなく市民生活に密着した情報が提供されるようになった。</p> <p>この作品では、職員の新野聡氏にインタビューを行っている。彼によると、当初苦労したことは、取材の困難さだったという。だが、今ではこのラジオを通して、さまざまな人とつながることができ、知り合いが増え、取材がしやすくなったという。そして、知人が増えることを通して、支援グループと支援を求めているグループの双方とつながることができ、媒介者として成果が得ることができたと語っている。</p> <p>また、これからの経営については、長く続けること、恒久化したいと答えている。「南相馬ひばりエフエム」は臨時災害FMとコミュニティFMの中間に位置する放送局となり、復興へ向かう人々を取り上げ、励まし合い、結びつき合うメディアになることをめざすという。学生に期待することは、ぜひ一度は被災地に来て、現場を見てほしいという。</p> <p>次に、重度の障がい者のための介護施設「ディサポートセンター・ぴ〜なっつ」代表理事、青田由幸氏にインタビューを行った。青田氏は自分の子どもが障がいを持って生まれてきたことがきっかけで、今の仕事に就いたという。青田氏によると、災害で健康者が亡くなる比率は1%だが、障がい者は2%だという。障がい者や高齢者は災害に弱いということであり、社会の問題の反映だという。原発災害は電力会社の責任だが、被災者の家族を支える人は自分を責める。また、放射線の話はタブーとなり、いろいろな意見を持っている人がいる。話し合っても結論は得られず、しかも双方の間に不信感が残るといふ。そして、私たちに伝えたいことは、東京のニュースだけではなく、福島ニュースも見てほしいこと、そしてもっとも大切なのは、まわりに被災者がいたら声をかけることだと語っている。</p>
2014	<p>タイトル： 川内村を訪ねて 撮影日：12月19日 制作者：大澤義輝、若田部愛、新田純哉、堀上駿、坂本旬 取材対象：川内村役場、長福寺、サポートセンター 動画：10分18秒 執筆者：ソウ・ギョウセン</p>	<p>この映像は地域学習支援実習生による作品である。メディアが本当に報じなければならないことは何か、災害に遭遇した人は今どのような困難に直面しているのかを尋ね、メディアの役割を考え直すことを目的とした川内村での取材記録である。川内村は自然が豊かな村である。東日本大震災と福島第一原発事故が発生した後、福島第一原子力発電所の直径30キロ以内の住民は避難することになった。川内村は福島第一原発から30キロ圏内にあるため、避難指示によって、一時全村避難となった。村内の長福寺の住職矢内俊見氏によると、当時は原発により近い富岡町から1000人ほどの人々がやってきた。彼らのための食事と宿泊場所を用意したという。</p> <p>さらに詳しい状況を知るため、川内村役場にいき、副村長の猪狩貢氏にインタビューを行った。震災前、川内村の人口は3000人以上だった。インタビュー当時、放射線量は全体的に低くなり、元の生活に戻れるようになっていたが、戻ってきたのは半数にあたる約1500人ほどであった。</p> <p>次に取材したのはまだ村に残っている住民を支えるために、震災一年後、川内村に住む知的障がい者の交流場として設立された「サロンどじょう」である。このサロンのスタッフの一人は家族といった川内村を離れたが、川内村の復興のために一人で戻り、「サロンどじょう」のスタッフになったという。</p> <p>村には仮設住宅も多く設置されている。住宅の設置だけでは解決できない問題も多い。仮設住宅の近くにあるサポートセンターは、住居者の生活や心理的な面でのサポートを行っている。サポートセンターの責任者猪狩ゆみこ氏によると、災害以前は家族と暮らしていたものの、今は自分で一人暮らししている人が多いという。このような人々は寂しさのため夕方になると涙が溢れる人も多いという。このため、人々の心理面をサポートするようになった。テレビでは、避難解除といった前向きなニュースしかないが、実際は、テレビとのギャップが大きい。この作品では、最後に幼稚園の子どもたちの姿が映し出される。そしてナレーションは、ここは彼らにとってかけがえのない故郷であり、この地に生きているという現実を知ってほしいと結んでいる。</p>

年度	映像情報	解 説
2014	タイトル： 学生研究発表会上映作品（川内村編） 撮影日：12月19日 制作者：坂本ゼミ 取材対象：川内村役場、仮設住宅、サロンドじょう等 動画：3分27秒 執筆：ソウ・ギョウセン	<p>この動画は2014年度坂本ゼミ3年生が学生研究発表会と川内村のインターネット放送局「川内かえるチャンネル」に提供することを目的に制作された。この放送局は川内の魅力を発信するために活動している。</p> <p>ゼミ生はA班、B班、C班の3グループに分かれ、それぞれの設定したテーマに沿って取材活動をした。A班は川内村の副村長にインタビューし、村の仮設住宅を訪問した。B班は川内村の消防士の防災訓練を見学したあと、近くのNPO「サロンドじょう」取材した。C班は川内村の名誉村民である草野心平と彼が愛していた川内の自然環境取材した。</p> <p>A班は、猪狩副村長のインタビューを行った。東日本大震災と福島第一原発事故が発生した後、福島第一原子力発電所の直径30キロ以内の住民を避難させることになった。川内村は避難指示によって、一時は全村85%以上の住人が避難した。しかし、取材当時でも、戻ってくる村人は少なかった。また、仮設住宅での取材によると、以前に比べて一人で住んでいる人は大きく増加した。車の通りが少なく、寂しいと感じる住人が多いという。B班はまず富岡消防署川内出張署の協力の下で、防災訓練を見学したあと、「サロンドじょう」取材した。スタッフによると、戻ってくる人は一人暮らしの人が多く、孤独を解消するために知的障がい者の交流場所が必要だと考えて設立されたという。C班は草野心平と川内村の自然を取材した。草野心平は福島出身の詩人であり、1987年に文化勲章が授与された。川内村は山に囲まれ、自然が豊かな村である。</p>
2015	タイトル： フラダンス川内村 撮影日：6月6日 制作者：n.d. 取材対象：いわなの郷感謝祭（福島県川内村） 動画：18分35秒 執筆：中山賢吾	<p>福島県川内村にある交流施設「いわなの郷」は、釣り堀、レストラン、コテージなどの施設があるレジャーの拠点である。この動画はそのいわなの郷の20周年を記念した感謝祭で披露されたフラダンスの様子を撮影したものである。生バンドによる演奏、様々な衣装に身を包み踊る姿、それを熱心に見つめる観客たちが印象的だった。動画ではフラダンスのみが取り上げられていたが、他にもいわなの釣り大会や力士による餅つきも開催された。</p> <p>川内村は、震災が発生した日から4日後の3月16日に村民へ避難指示が出され、翌日には富岡町の住民とともに郡山市へ集団避難が行われた。120年余の歴史の中で初めての全村避難となった。震災で川内村は放射線、人口減、地域コミュニティの崩壊、農地の荒廃など多くの影響を受けた。いわなの郷も全村避難により営業を休止。しかし、震災から2年後の2013年には全面再開し、利用客も年々回復しているという。</p> <p>こうした背景の中で開催されたいわなの郷感謝祭。フラダンスの中には、復興途ながらも強く生きる人々の想いが感じられた。</p>
2015	タイトル： 福島浜通り・人々の生活 撮影日：9月3～4日 制作者：足立光人、岩淵祐太郎、清水南、竹花あずさ、村上晴香 取材対象：ふたば未来学園高校丹野純一校長と生徒、富岡町の人々、広野町の人々、風見正博、坂本ゼミ 動画：14分29秒 執筆：高田結梨葉	<p>この動画は、福島県を訪問した学生たちの視点で描かれている。地域学習支援を学ぶ学生たちが三日間の取材で撮影した動画をまとめて、福島における復興の現状をつたえるものである。</p> <p>最初の場面では、富岡町を訪れ、震災から四年がたっても進まない復興の現実にそれぞれ戸惑いの表情を見せる場面が印象的である。現場で働く人への取材では、仕事がつきわけではなく放射線量が多いことに苦労をしているという声が上がっていた。広野町での取材では地元の女性が、「ウソばっか言うから役場の人とか 町長さんなんか特にね」「表ばっかし見ていかないで本当に裏見てってください」と感情をあらわにする場面もあった。</p> <p>その後ふたば未来学園高等学校を訪れ、校長に取材を行った。校長は福島小さな町に現れる問題点について触れながら、学校として何ができるのかを語った。生徒たちも校長の意思をしっかりと継いで、自分たちのつらい経験を後世に伝えるという考えをしっかりと持っていた。その後取材班は、かつてヒッピーだった男性に取材をした。彼は自然を管理するものがあってはならないと語った。チェルノブイリの事故後から原発反対運動を行ってきた彼は、「運動をしていた人」から「被害者」になった。そんな彼は、周りに流されず自分なりの価値観を自分で見つけ出してほしいと語っていた。震災から四年がたっても復興はまだ始まったばかりである。メディアが復興の現状について報じる機会がなくなっても興味を持ち続け、後の世代に語り継いで行かなければならない、そういった決意のナレーションで動画は締められている。</p> <p>地域の人々に直接インタビューしているため、より生の声をリアルに聞くことができる映像となっている。印象的なシーンも多く、また取材を行った学生たちの表情の変化などからも現場の深刻さを感じ取ることができる。</p>

年度	映像情報	解説
2016	<p>タイトル： 石巻から福島へ そしてアチェの若者と子どもたち 撮影日：8月19～22日 取材対象：宮城県石巻市大川小学校跡、宮城県石巻市南浜つなぐ館、宮城県東松山市宮戸島、福島県南相馬市小高地区、福島県浪江町、宮城県青年団連絡協議会、まちアート研究所、NPO法人野馬土、NPO法人地球対話ラボ 動画：15分10秒 <a href="https://youtu.be/pTPRaKFBYQI">https://youtu.be/pTPRaKFBYQI</a> 執筆者：中山賢吾</p>	<p>この動画は、2016年8月19～22日の間に宮城県と福島県を訪れた実習の様子を記録したものである。この実習には2004年に起きたスマトラ島沖地震で最も被害を受けたインドネシアのアチェ州から来日した3名の若者も参加している。実習の目的として、「被災地に実際に赴くことで普段自分たちが当たり前のように受け入れているメディアによって伝えられている情報を見つめ直すこと」、「子どもの地域学習のサポートを通じてよりよい支援の形を考えること」の2点が挙げられている。</p> <p>1日目は宮城県石巻市にある大川小学校跡を見学した。映像では宮城県青年団連絡協議会の岩崎大輔氏による生徒74人、教職員10人が犠牲になったという話や廃墟と化した建物からは津波の恐ろしさを垣間見ることができる。次に訪れたのは同じ市内にある南浜つなぐ館。ここは東日本大震災の記憶を後世へつなぐ情報ステーションとして建てられた場所で、被災した人々の想いや当時の様子を知ることができる。</p> <p>2日目は宮城県東松山市宮戸島を訪れた。学生たちはNPO法人地球対話ラボが主宰するプログラムのサポートスタッフを務めた。このプログラムは宮戸島へ訪れた子どもたちが記者となってインドネシア人学生とともに宮戸島を探検するといった内容になっている。子どもたちが実際に撮影を行い、宮戸島に住む人たちにどのような生活をしているのか、宮戸島はどういったところなのかインタビューする。小学生たちが撮影した映像は大学生が小学生の意見を取り入れながら編集した後、上映会が行われた。国際交流や島の人々へのインタビューに積極的に臨む小学生の姿が印象的である。</p> <p>3日目は福島県南相馬市の小高地区や浪江町などをNPO法人野馬土の三浦広志氏の話聞きながらバスで見学した。当時のまま残る家や瓦礫を見て復興までの道のりが長いということを感じられる。実習を終えた学生へのインタビューではメディアでは報道されない部分があることに気づいたこと、復興とは元通りに戻すということではないと知ったことなど多くの学びを聞くことができる。映像の最後には、自分と発信者の視点を意識し様々な立場の人たちと実際に関わって情報を共有していくことが地域を俯瞰的に理解するうえで大切になってくるのではないかと語られている。この実習には地域について自分たちが学ぶという側面と地域について学ぶ人をサポートするという側面が見られ、上記の気づきはこれら2つの側面を体験したからこそ見えてくるものだと感じる映像である。</p>
2017	<p>タイトル： 私たちの震災リアル 撮影日：9月2～4日 取材対象：宮城県石巻市大川小学校跡、宮城県石巻市南浜つなぐ館、宮城県東松山市震災復興伝承館、福島県浪江町、宮城県青年団連絡協議会、NPO法人野馬土 動画：22分27秒 執筆者：中山賢吾</p>	<p>この動画は地域学習支援実習の授業内で制作された作品である。最初に訪れたのは宮城県石巻市大川小学校跡。ここで宮城県青年団連絡協議会の岩崎大輔氏から、小学生たちをどこへ避難させるかという議論がまともなうちに津波に巻き込まれてしまったという話を聞く。当時のまま残っている大川小跡には津波の爪痕が色濃く居残っている。学生たちも津波の被害の大きさに驚愕している様子が見える。</p> <p>次に訪れた南浜つなぐ館では当時の様子を知ろうと熱心に見学する学生たちの姿が見られた。また、造船場で設計の仕事をしていた岩崎氏から震災当日のお話も聞いた。今までに経験をしたことがない揺れを感じた後、大津波警報が発令され、職場の2階に避難したものの、腰の高さまで浸水したという。そこで屋上へ避難しようとしたが、非常階段がなかったため、建物内のカーテンやシートをひも状にして、屋上へ上がった。このようなリアルな体験を何うことができた。</p> <p>翌日は宮城県東松山市震災復興伝承館を訪れた。ここでは職員から震災当時の話を聞いたり、映像を視聴したりすることができる。映像では、倒っていた犬が心配になり自宅へ引き返し行方不明になった女性の夫が自己判断しないで何も取らなくていいから命だけは守るということを鉄則として避難することが大切だと話すシーンが印象的である。この見学をへて学生たちは自分がもし震災に巻き込まれたらどうすればいいのか考えるとともにこれらを伝えていくという役目があると感じている。その後、福島県浪江町をバスで見学しながらNPO法人野馬土の三浦氏の話聞く。お話の中では、オリンピックに間に合わせるために、安全を100%確保できないにもかかわらず避難指示解除していることなど震災から6年が経過した被災地が抱える現状を知ることができた。学生たちは、実際に目で見て体験したことで、津波の被害の甚大さだけでなく、報道されることがない復興に携わる人々の強さも同時に知ることができたであろう。</p>



年度	映像情報	解説
2017	<p>タイトル： 地域学習支援実習（石巻） 撮影日：9月2～4日 制作者：伊東拓馬、猪股葉奈、押切飛鳥、伊藤花奈、内田京樺、進藤亜海、藤岡早希、針生さえみ、麻生真菜 取材対象：宮城県石巻市大川小学校跡、宮城県石巻市南浜つなぐ館、宮城県石巻市日和山公園、宮城県東松島市、津波避難タワー 福島県南相馬市、福島県浪江町、福島県富岡町、福島県川内村 宮城県青年団連絡協議会、NPO法人野馬土、西郷三匹獅子舞保存会 動画：13分08秒 執筆：中山賢吾</p>	<p>この動画は坂本ゼミ生によって制作された作品である。「私たちの震災リアル」と比較すると、川内村の取材が含まれるとともに、全体としてコンパクトにまとめられている。この作品では、取材場所にに応じて動画が3つに分けられている。1つ目は宮城県の被災地。まず最初に宮城県青年団連絡協議会の方と共に大川小学校跡へ向かった。廃墟と化した小学校を見て、ショックを受けている人が多数見られた。その様子から実際に現場を見ることと映像で見ることには大きな差があると感じた。大川小学校の他にも、日和山公園、津波避難タワーなどの被災箇所を回っている。その後、震災当時の写真や映像など震災についての様々な資料が展示してある南浜つなぐ館を訪れた。学生たちは当時の資料を見て、震災の規模がどれだけのものだったのか改めて知ったのである。一人の学生が住民の語る「風化しても良い」の意味がなんとなく分かったと答えたことが印象的である。最後には、石巻市で実際に震災に触れたからこそ分かったものも多く、そこで学んだことを後世に伝える使命があると述べている。</p> <p>2つ目は福島県南相馬市、浪江町、富岡町。南相馬市小高区で農業をしていたNPO法人野馬土の三浦広志氏に被災地をバスで案内された。三浦氏の話では、農林水産省に南相馬市に来て一緒に復興の事業を立ち上げてほしいと交渉したところ、「国家公務員は福島のような危険なところには行ってはいけないことになっている」と言われ、来ないことが分かったという。バスはそんな国家公務員が立ち入ることができない地域へ向かった。人が住んで良いと言われているにもかかわらず、バスの窓からは立ち入り禁止を示す黄色いテープが見られた。その後訪れた福島県富岡町では、斜めに曲がった状態の電柱や看板が残されており、津波の爪痕がくっきりと残っていた。しかし、周辺は復旧復興が進み、東日本大震災の記憶が徐々に風化していくということが感じ取れる。学生たちはこの実習で一日一日を積み重ねてゆく「尊さ」を学んだ。</p> <p>3つ目は、福島県双葉郡川内村西郷地区。この地で江戸時代から継承され続け、福島県の重要無形民俗文化財に指定された「西郷三匹獅子舞」、その保存会の方に取材を行った。西郷三匹獅子舞は、無病息災五穀豊稔を祈願して小学生から中学生の男の子が舞うものである。しかし、震災後、付近の小学校の児童が約半数に減ってしまったことでその継承が難しくなってしまったのだという。この取材を通して、学生たちは震災の影響はこうした文化の存続にも及んでいるということを理解した。</p>
2018	<p>タイトル： 四倉小学校 撮影日：9月14日 制作者：坂本ゼミ 取材対象：福島県いわき市四倉小学校 動画：2分15秒 執筆：中山賢吾</p>	<p>この動画は9月11日～14日にかけて行われた福島へのゼミ合宿最終日、福島県いわき市四倉小学校へ訪問した様子を撮影したものである。目的は、小学校の児童の「地元の四倉を紹介する動画」の作成を手伝うこと。小学生たちが1班5人ほどに分かれ、そこに大学生が付き、動画作成の支援をした。まずは自己紹介から始まり、小学生たちが問題に思っている部分をヒアリングした。それからアドバイスをを行い、撮影や編集を大学生が支援した。動画では、素材が足りないという悩みがあり、再び外へ撮影をしに向かったり、動画に入れる文字の大きさはどのくらいが良いか相談したりして共に制作する姿が見られた。作成後は上映会も行われ、上映終了後は拍手が響き渡っていた。</p> <p>ちなみにこの動画には含まれていないが、学生たちは1日目にNPO法人カタリバで活動する卒業生へのインタビュー、2日目は、福島県双葉郡広野町の広野中学校の授業への参加、3日目は福島県浪江町、富岡町で取材を行っている。</p> <p>四倉小学校がある福島県いわき市では震災当時、震度6弱の揺れに見舞われ、その後も定期的に大きな余震が続いた。震災直後被害の状況（2011年8月2日）は市内の死者308人、行方不明者39人、建物被害は全半壊合わせて24,750戸、被害総額は約35億円にも及んでいた。原子力発電所関連の被害もあり、原発事故が過剰に報道されたことによる風評被害が深刻化し、支援物資やガソリンなどの物流が停滞し、水道の応援部隊が市内に入っていないなど、災害対策に大きな支障をきたした。加えて福島県産の農産物だけでなく、工業製品の出荷にも悪影響を与えた。このように風評被害を受けただけでなく、海洋汚染による水産業の操業停止などもあり経済的に大きな打撃を受けた。しかし、四倉小学校は2015年2月22日、当時、いわき市で唯一のユネスコスクールに認定され、以来ESD教育を推進しており、ESD活動の一環としてオリーブを育て、防潮堤の一部に防災林として2018年に育ててきたオリーブを移植するなど精力的に活動している。また、地域の方々と密接に関わりながら学習活動を展開している。</p> <p>この動画では上記のような震災の被害から立ち直ろうとしている地域の魅力を子どもたちが積極的に映像で表現しようとしている姿が見られる。</p>

年度	映像情報	解 説
2019	タイトル： 福島大学インタビュー 撮影日：9月7日 取材対象：福島大学教職員・学生 動画：1時間6分37秒 執筆者：福山瑠子	<p>この動画は、川内村いわなの郷で実施された福島大学教員と学生へのインタビュー映像である。福島大学には「地域実践特修プログラム（愛称：ふくしま未来学）」という地域について実践的な力を養うために設定された科目がある。「地域実践特修プログラム」の中心科目には、講義形式の「ふくしま未来学入門Ⅰ・Ⅱ」やフィールドワーク科目「むらの大学」などがある。今回の動画では、「むらの大学」の中の1つである3泊4日の夏季フィールドワークの前半に参加し、そのプログラムや福島への取材している。このプログラムは原発事故により避難を余儀なくされ、現在、復興と地域再生に取り組む地域である双葉郡川内村・南相馬市小高区をくり返し訪れ、地域住民の方々との交流・調査と地域の課題解決に向けた活動を1年かけて行う授業である。</p> <p>動画前半はこのプログラムに参加している3人の大学教員へのインタビューである。このプログラムに参加する理由や想い、それぞれの方の経験についても尋ねている。後半は参加している学生への取材を行い、「むらの大学」を受講するきっかけや受講してみて見つけた課題、感じたことなどを質問する。自分の住む地域をするため、地元に戻元するためや、このプログラムを受講したくて福島大学を選んだという学生もいて、学びへの意識の高さがうかがえる。</p> <p>この取材は法政大学という東京の大学と福島大学との交流の機会でもあった。東京の学生と交流してみても感想についても質問している。出身地域によっての違いやその生きてきた環境の違いが感じられた。最後は福島大学の学生から法政大学の学生へ逆質問がある。福島に来て感じたことや東京から来て見た福島の魅力、さらに学生自身の事について答えている。</p>
2019	タイトル： 石巻つなぐ館インタビュー 撮影日：9月8日 制作者：坂本ゼミ 取材対象：石巻つなぐ館 動画：34分09秒 執筆者：福山瑠子	<p>この動画は、南浜つなぐ館の取材である。南浜つなぐ館は震災前の町の復元模型や震災直後の様子が見られるVRグラス、震災遺構・旧門脇小学校校舎の3次元モデル、復興祈念公園の計画案等が展示され、東日本大震災の記憶を残そうという貴重な施設である。動画では、学生が実際にその展示品に触れ、スタッフの話の聞き中や、東日本大震災の現実を感じ取っている様子が撮影されている。</p> <p>この施設の運営をする「3.11みらいサポート」は「つなぐ 3.11の学びを生きる力に」をミッションとし、災害から命を守ることでできる社会の実現を目指して活動する公益社団法人である。東日本大震災発生後に発足し、形を変えながら様々な取り組みを行っている。動画の冒頭で、職員が町の復元模型を用いて、震災当時の様子などを説明や復興祈念公園や津波の被害を受けた看板や被災した園児の遺体と共に残っていた上履きとクレヨンなど展示品について解説している。</p> <p>中盤からはスタッフによる講演が中心となる。NPO団体「3.11みらいサポート」の概要と取り組み、東日本大震災についての現実やその教訓など話している。学生からの質疑応答も記録されている。あの時逃げていれば、津波を警戒していれば助けられた命があったことを、過去の事実で終わりにするのではなく、それを伝えることでもう同じ悲劇を繰り返さない、というメッセージは団体のミッションである災害から命を守ることでできる社会の実現へと繋がる。</p> <p>「他人事ではなく、もし自分がこの状況になったら」と想像してほしいという言葉から、聞いて見て終わりではなく、想像して自分のこととして受け止めてもらいたい、そして決して風化させず、少しでも多くの人たちに東日本大震災の濃い記憶を伝え、教訓や想いを語り継ぎ、生きて、一人一人に、そして未来に繋げていこうというその想いが伝わってくる。</p>
2019	タイトル： メディフェス2019発表石巻編 撮影日：9月8日 取材対象：石巻市日和山、南浜つなぐ館、大川小学校 動画：7分24秒 <a href="https://youtu.be/NHIE24NQRG4">https://youtu.be/NHIE24NQRG4</a> 執筆者：福山瑠子	<p>この動画は、宮城県青年団連絡協議会の協力のもと、石巻市内の被災地視察を行った様子を学生研究発表用にまとめたものである。2019年11月23日、北千住で開催された全国の市民映像フェスティバル「メディフェス2019」でも上映された。</p> <p>震災から8年が過ぎ、東日本大震災の記憶が全国的に風化してきている中、現地ではその悲しみは消えていない。現地では、二度と同じ悲しみを繰り返さないようにと、その記憶をより多くの人、そして次の世代へと語り継ぐための様々な取り組みがなされている。案内した宮城県青年団連絡協議会のメンバーは地域を盛り上げるためのボランティア活動をしており、震災当時の様子や復興の現状、地域の生の声を伝えている。</p> <p>まず、震災時避難場所になった日和山へ向かう。市街を見下ろすことができ、復興の実態を知ることができる。震災当時の津波や山に逃げた住民の様子について解説している。訪問2か所目の南浜つなぐ館は震災前の町の復元模型や震災直後の様子が見られるVRグラス、震災遺構・旧門脇小学校校舎の3次元モデル、復興祈念公園の計画案等を展示する施設である。被災された幼稚園バスのお話や貴重な展示品も残されている。詳しい内容は「2019石巻つなぐ館インタビュー」を参照してほしい。</p> <p>最後の訪問地は大川小学校跡である。石巻市釜谷地区、北上川河口から約4キロの場所に位置した大川小学校は、震災時津波にのまれ生徒74名教員10名が被災した。校舎は震災当時のまま残されており、津波の怖さを後世へと伝える貴重な施設である。坂本ゼミでは2016年、2017年にもこの大川小学校跡と前述の南浜つなぐ館を取材している。</p>

**参考文献**

坂本旬、寺崎里水、笹川孝一 (2019) 福島における「持続可能な開発のための教育」のための地域学習支援、法政大学キャリアデザイン学会紀要 (第 16 巻 2 号)  
田邊美樹 (2021) 人と人の間に在るもの—マイクロ

の視点で振り返る東日本大震災—、メディア情報リテラシー研究 (第 2 巻 2 号)、法政大学図書館司書課程

松本恭幸 (2013) コミュニティメディアの新展開、学文社